

環境保全、持続可能性の観点を重視した園庭整備 —乳幼児が主体的・対話的に遊べる場の探究—

幼保連携型認定こども園町田自然幼稚園

峰友航

他 9 名

1. 研究の目的

今回の研究は幼保連携型認定子ども園教育・保育要領に基づき、子どもや保育者にとって主体的・対話的で深い学びとなる持続可能な環境を探究すること、保育者の専門性を向上させ保育の質を高めることを目指すこと、乳幼児の興味や関心を広げ、学びを深める環境作りを行い、各年齢の姿を捉えてカリキュラムに反映させることを目的とする。

2. 研究課題選定の理由・背景

本研究の選定の背景には本園の園庭環境に理由がある。本園は保育理念を「いきいき」とし、自然と遊び、自然に学び、心育む・創る意欲を大切に保育展開している東京の郊外にある幼保連携型認定こども園である。1800坪の園庭・雑木林に園舎が点在しており、様々な収穫を食育と結びつけ、自然、健康、意欲、体験、表現活動に力を入れている。子どもたちの心の動きを感じながら「やってみたい。」を実現できる保育を心がけている。自然が多い園庭は四季により姿を変え、草花や虫、鳥たちと出会うことが出来、風やにおいも感じられる。色や形・音など、子どもたちが五感を通して自然を感じるができる環境がある。しかし一方で、子ども的人数が多いが故に、日常的に子どもたちが通ったり走ったりする園庭の中心部分では中々植物が根付かない、園庭にある植物は採取してしまうと数が少なくなる為、基本的に保育者は「植物は大切に採らないでね。」という言葉掛けになってしまい自然物を保育の教材として活かすできていない現状があった。子どもたちは植物を抜いてしまったり、木を折ってしまったり自然や生き物を大切に思う姿が少なく、保育に課題があった。また園にビオトープと呼ばれる場所があるが、水生生物や植物が少なく、保育環境や学びとしてのビオトープに活かすできていない部分も見られていた。さらに、園庭が広く入り組んでいる為に保育者としての役割が子どもの安全を守る事に集中してしまい、園庭にある自然環境をどのように保育に活かすのかという保育者としての専門性にも課題が挙げられる。以上の理由から本園の園庭環境を改めて捉え直し、子どもや保育者にとって主体的・対話的で深い学びとなる持続可能な豊かな園庭環境とは何かを考察しながら環境を作り替え、乳幼児の興味や関心を広げ、思いやりのある心と豊かな感性を育んでいきたいと考え、課題を選定した。

3. 研究の方法

本研究では、まず、ビオトープ及び周辺環境でどのような植物や生き物が生息しているのかを調査し、ビオトープを含めた園庭環境を改めて把握し、それぞれの植物や生き物、生息環境について調べ、その環境に子どもがどのように関わるのかを子どもの姿を見ながら保育計画を立て、環境整備をしていく。自然環境を保育で活かすことが目的である為、計画と整備、ふりかえりを重ねていく。また、自然豊かな園庭環境を整備している認定こども園（2園）を視察し、具体的な生き物や植物の管理や活用の方法、子どもたちにとって魅力的な場を作る工夫の方法やそれまでに至る過程の調査を行う。視察により持ち寄った情報の整理を行い、保育者同士で情報共有を行い、それらを参考に地元の環境を視野に入れながら環境改善を行っていく。そして、環境改善を行いながら、子どもたちがそれらの環境にどのように関わっているのか分析を行い、子どもの学びが深まるようこまめに環境の見直しを行っていく。最後に「学びの共同体」となる保育者・保護者や子どもたちの成長する過程を記録、共有し、それらの繋がり可視化まで試みる。

4. 具体的な子どもの姿に基づく実践報告

4. 1 園庭の緑地化

まずは園庭環境の把握から始め、それぞれの場所での子どもの遊ぶ姿を観察した。そして広く走り回ることが出来る広場にはその子どもの姿が継続されるよう芝生を植え、ごっこ遊びが展開されることが多いビオトープ付近にはごっこ遊びに取り入れる事が出来るクローバーや四季を感じられる植物を植えることとした。



4. 1. 1 土壌改良

園庭環境を調べていくと、子どもたちが通ったり走ったりする園庭の土壌は固まり、植物が根付きづらくなっていることから土壌改良を行った。土壌を掘り進めそれらの土に肥料を混ぜた。その姿を見た5歳児クラスの子どもたちから「何をしているの?」「ぼくもやりたい。」と興味を持つ姿が見られ、一緒に土壌改良を行った。子どもたちは「よいしょ。」と声を掛け合いながら取り組み、土壌改良も遊びの1つになっていた。

また土壌改良は、畑の土づくりをしていた4歳児クラ



スでも見られた。発酵がやや進みすぎた肥料を土に混ぜたために保育者が頻繁に天地替えを行っていたところ、それを手伝うことから始まり、やがて子どもたちだけで「日本の土を作ろう。」と言いながらしばらく続く遊びとなっていた。

4. 1. 2 植物を植える

4. 1. 2-1 クローバー

土壌改良のあと、子どもと一緒にクローバーを植えた。植える際に子どもたちは「ここに他のお友達が入ったら種とかが死んじゃうね。」などと話す姿も見られ、「看板を作ったらここに入らないって分かるよね?」ということから、看板製作を行うことになった。看板には文字に加えて、その植物が大きくなる姿を想像した植物の絵も描き、看板が完成した。蒔いた種の近くに看板を



立て、「これで大丈夫。」と嬉しそうな表情も見せていた。そして水をあげ、「大きくなりますように。」と声を掛ける姿も見られた。その後も子どもたちは植物の成長を気にかかけ、こまめにクローバーを観察する子どももいた。また、土を踏まないように「ここには入らないでね。」と3歳児クラスの子どものたちにも優しく伝え、大切にしている姿も見られた。



そして、クローバーが芽を出すと「わあー。出てきたよ。」とクローバーの成長を喜び、様々な人に芽を出したことを教えていた。自分たちが蒔いた種に子どもたち自身でこまめに水をあげ、大切にしていた姿から過程を共有しながら環境を整備していくことが大切であると強く感じた。

4. 1. 2-2 芝生

芝生の種は均等に蒔く必要があり、主に保育者で行った。芝生の種を蒔いた園庭には芝生が根付くまで立ち入らないようにラインを引き、経過を待った。子どもたちは芝生の成長を見る度に「また大きくなっている。」と感じ、今まで見たことのない園庭の風景に「早く遊びたいな。」と話す姿もあった。



そして夏が近づくと芝生が大きくなり、芝生の上で遊べるようになった。芝生の広場を開放する前に調べてみると芝生を育てるには休ませる期間も必要だということが分かり、はじめは月曜日と金曜日を開放する日にした。そして、芝生を開放すると子どもたちは「たくさん葉っぱがある。」と話し、これまでとは違う園庭を走り回る姿が見られた。ま

た、芝生に集まったバッタを友だちと協力して捕まえる姿も見られた。8月になり例年であるとプールで水遊びが行われるが今年にはコロナウイルスの影響で中止になった。しかし、芝生の園庭で裸足になることが出来た為、芝生の上で水遊びをすることが出来た。子どもたちは芝生の感触を楽しみながら、隣の寺から取ってきた竹でオリジナルの水鉄砲を作り、友だち同士で水を掛け合いながら遊ぶことができた。今年には制限がある環境の中で過ごすことが多かったが、芝生があったことにより限られた中でも夏を感じられる遊びを展開することが出来た。一方で芝生の開放日を設けてしまったことにより、開放日以外の子どもの遊ぶ場所が狭くなってしまったことが課題に挙げられる。子どもの学びと園庭環境の維持のバランスを改めて考え直す必要があると考える。



4. 1. 2-3 その他

その他に植物を植えづらく土が浮き出てしまっている所には、グラウンドカバーとしてクラピアを植えてみた。その様子を見た子どもが別の場所で「この草さっきのやつに似ているね。」とクラピアに似ている草を発見した。「これも園庭に植えてみよう。」という子どもの提案から、「雑草」と言われている植物を園庭に植える実験が始まった。



すると園庭にある他の植物にも興味も持ち始め「何かいい匂いがするね」「綺麗だね。」「何かグレープフルーツの香りだね！」と植物を触ったり、嗅いだりしながらどんな植物か確かめ、「これも埋めてみよう。」と色々な植物を植えてみる姿が見られるようになった。子どもたちは植物に興味を持ち知識を伝え合ったり、他の植物にも興味を示し探究心を持って関わる姿が増えた。

また空いている花壇に保護者と保育者が植えたマリーゴールドが育つと、4歳児クラスの子どもたちはその花で色水を作ったり、5歳児クラスの子どもたちはランチルームの飾りにしたり、お地蔵さまを彩ったりし様々な遊びがはじまり、マリーゴールドの花を使った遊びが広がっていった。2歳児クラスの子どもたちは染め物遊びを行い、保育者と一緒に花を集め、布を染める経験をすることもできた。保育者同士は、



花を摘み過ぎずつぼみを残すことを心がけるといいうゆるやかな申し合わせをしていただけだったが、初夏から晩秋まで長い間遊び続けることができていた。

4. 2 実のなる植物・木

4. 2. 1 実のなる植物

5歳児クラスで園庭に実のなる植物を増やそうと計画し、子どもたちと植えたい・食べたい植物を話し合い、園庭の斜面には西瓜を植えることになった。その他にも蝶の好きな柚子やレモン、他園から園庭視察の際にもらったバナナなども植えた。中でもバナナの苗植えは子どもたちと一緒に土を準備し、植えながら「バナナが出来たらどうやって食べる?」「ジュースとかケーキがいいな。」などと友だち同士でバナナの話をして取り組み、バナナの収穫に期待を感じる様子が見られた。そして、登園する度に「大きくなってね。」と言葉を掛けながら毎日水をあげていた。そんなある日いつものようにバナナの木を観察してみると「先生たいへん。バナナが枯れている。」と2～3日前に移植したバナナの元気がなくなっているのに気づき、心配そうに葉を撫でる姿が見られた。子どもたちは枯れたバナナをどうにかしてあげたいと考え、「誰かに聞いてみよう。」と詳しい保育者を探してみるようになった。探している間も「太陽に当てたらなおる?」「丸い月みたいな当てたらどうかな?トントントンって。」と様々な方法を考える姿が見られた。また幾人も保育者に声を掛け、ある保育者から「寒いからかな?」と聞くと「あ、じゃあ夏になったらなおるんじゃないかな?」とひとまず納得のいく答えにたどり着いた様子で、すっきりとした表情をしていた子どももいた。バナナの木から疑問を持ち、考え、人に質問し、また考えて結論を出すという姿も見られた。また別の日には、友だちと遊んでいる拍子にバナナの苗にぶつかってしまい、折れてしまったことがあった。ぶつかってしまった子どもは保育者に「一生懸命植えたバナナの木が折れちゃった。」と話し、悲しむ様子が見られたため、保育者は子どもとしばらく一緒にバナナの木を治す方法を考えた。実は以前からこのクラスでは植物をすぐに採ってしまう子どもたちの姿から植物を大切に扱うことを育ちのねらいにしていた。クローバーの芽生えに気づいたり、バナナの苗と一緒に植え、世話をすることを経験しながら、植物を大切にする姿が見られるようになってきている。



4. 2. 2 どんぐり

秋になると園庭には多くのどんぐりが転がっている。1歳児クラスから5歳児クラスまで、また園庭開放に遊びに来る地域の小さな子どもたちも、夢中になって拾う姿が見られる。2・3歳児のおままごとにもよく遊びに使っている。その中で4・5歳クラスの子どもたちはどんぐりを剥いたり、どんぐりを形や種類ごとに分けて楽しむ姿が見られた。また、園庭に設置した実のなる木のマップを見ながらどんぐりがどの辺りに落ちているかを話し合い、「どの辺りに落ちているかな?」「この辺りにあるんじゃない?」などと友だちと相談し「じゃあここに行ってみよう。」とマップを活用しながらどんぐり探しをしている姿もあった。冬になり落ちているどんぐりから根っこが生えているのを発見し、「育てたら大きな木になるのかな。」とどんぐりを小さなカップに移し、子どもたちで育ててみる姿も見られた。また3歳児クラスの子どもたちがどんぐりを集めて入れておいたケースから、小さなどんぐりの芽がたくさん伸びはじめているのが見つかることもあった。どんぐりにたくさん触れて繰り返し遊ぶ経験から身近な自然物に興味を持ち、友だちと協力したり共有したりして楽しむ中で探究心を持って関わる姿も見られた。



4. 3 ビオトープを含めた水生生物の整備

4. 3. 1-1 ビオトープの整備

本園では水生生物と子どもたちとの関わりが少ないことも課題に挙げられた為、ビオトープの環境整備を行った。ビオトープには生き物がいないということからメダカを放流することにした。ビオトープの掃除や空気ポンプの設置など整備を進めていると、子どもたちは「何をやっているの?」と興味を持ち、「ぼくもやりたい。」と自然と子どもと一緒に整備を進めることになった。整備を進める中で「どうしたらメダカさんが住みやすいかな?」「鳥とかに食べられないように隠れる場所を作らないといけない。」と子どもたちと話し合いながら進めた。そして水生植物とメダカを用意し、ビオトープで入水式を行った。



4. 3. 1-2 メダカを放流

入水式当日はビオトープの準備を手伝った子どもたちは特に「早くやりたい。」と意欲を示していた。また「優しくしないとメダカさんが傷ついちゃうね。」と生き物を思う姿が見られた。一人1匹放流するというので、カップに入ったメダカを大切にゆっくりビオトープまで運ぶ姿が見られ、メダカの入水の時には「大きくなってね。」と優しく声を掛けながらメダカをビオトープに入れ、気持ちよさそうに泳いでいる姿に「ほら見て。ここだよ。」と友だちや保育者と楽しそうに話す姿が見られた。その後も自分たちで準備や整備をし、こまめにメダカを観察し、「大きくなっているね。」などとメダカの成長を喜んでいた。このような経験の積み重ねが命に関わる責任感に繋がっていくのかもしれないと考える。



4. 3. 1-3 田んぼで捕まえた生き物を放流

ビオトープの生き物をもっと増やしたいという子どもの思いから課外活動で行く里山で生き物を捕まえることにした。子どもたちは夢中になりながら生き物を捕まえ、メダカとヌマエビをビオトープに放った。子どもたちは「あれ。色が違うよ。」と以前放流したメダカと色が違うことに気付き、図鑑で調べる姿も見られた。また、以前よりビオトープを観察する姿が増えた。

4. 3. 2 その他

本園のビオトープ整備の活動を知ったご近所の方で蛍の保護活動をしている人が園を訪問し、ビオトープの水質調査を行った。井戸から水を出していることもあり、蛍に合う水質ではなかったが、蛍の餌であるカワニナという生き物をビオトープに放った。子どもたちは初めてみる水質調査に興味津々の様子で見つめ、カワニナをじっくり観察していた。翌日もビオトープを観察し、カワニナが通った跡を見つけ「何か迷路みたいになっているよ。」と新たな発見もあった。



4. 3. 3 水槽の設置

ビオトープに生き物を放った後、メダカやエビの色に興味を持つ子どもが多かったことから観察しやすいように室内の水槽を設置してメダカとエビを飼育することにした。そして環境が整った水槽を用意するのではなく、子どもと一緒に過程を共有するために水槽の掃除から子どもと共にいった。まずは洗うチームと、水草を部屋から



運ぶチームに分けて、友だち同士で役割分担をしながら準備を進め、「水草もお薬があるからすぐに入れてはいけない。」と聞くと「えびさんとか死んじゃうといやだね。」と話す姿も見られた。この水槽の準備は主に 5 歳児クラスで進められたがその姿を見た他歳児クラスの子どもたちも「何をやっているの?」「何を飼うの?」と興味を持つ姿もあった。そして、重たい砂も子どもたち同士で協力しながら洗い、子どもたち

が薬を抜いた水草を好きな場所に植え、「ここに置いた方がエビさんはいいいんじゃない?」と考えながら丁寧に植え付けをしていた。それらを終わるといよいよエビを水槽に入水させる。子どもたちは「エビが弱っちゃうから早く入れてね。」と声を掛け合い、優しくエビを入れてあげる姿が見られた。そして水槽で泳ぐエビを見て「泳いでいるよ。」と感動する姿も見られた。しかし、しばらく日数が経ち水槽を覗いてみるとエビが死んでしまっていた。その様子を見た子どもたちは「エビさんが死んでいるよ。」と悲しみ、保育者と一緒に「何で死んでしまったのか。」を考えた。子どもたちからは「薬がとれていなかったのかな。」「ザリガニが混ざっていたのかもしれない。」と色々な理由が挙がった。そして再び水草などを念入りに洗い準備を行い、またエビを水槽へと放った。一度エビが死んでしまったという経験から「エビさん元気にしているかな。」とエビのことを心配しながら観察する様子や友だちが上から手を入れようとしたり、物を入れようとしたりする場面では「触っちゃだめだよ。」と話しかける姿も見られた。部屋に水槽を設置したことにより、子どもたちが生き物を身近に感じ、大切に思う気持ちが生まれた。



るかな。」とエビのことを心配しながら観察する様子や友だちが上から手を入れようとしたり、物を入れようとしたりする場面では「触っちゃだめだよ。」と話しかける姿も見られた。部屋に水槽を設置したことにより、子どもたちが生き物を身近に感じ、大切に思う気持ちが生まれた。

4. 4 探究心を支える物的環境の導入

4. 4. 1 顕微鏡・ルーペ導入

7月に5歳児クラスで園庭で捕まえた虫を書画カメラで見る機会があり、カブトムシやヤモリ、カエルなどを拡大で観察をした。子どもたちは今までに見たことのない世界に興味を持ち、「他の虫とかも見て見たいな。」と話す姿が見られた。また新たな植物や生き物を導入し、それらを子どもの学びに繋げていけるようにハンディ顕微鏡とルーペを用意してみる事となった。子どもたちの人数が多い為、管理方法も含め保育者で導入方法を考え、まずは5歳児クラスで試験的に導入してみた。



4. 4. 1-1 頭皮を見る

5歳児クラスでは顕微鏡について子どもの前で説明を行い、使い方や見え方の写真を見ながら話すと、「使ってみたい。」と早速興味を示した。この日は雨天であった為部屋の中での使用だったが、子どもたちは身近なところで友だちの頭皮を観察しはじめ、「見えた。なんか穴みたいのがある。」と顕微鏡の見える世界に驚く姿が見られ、周りの子どももそれを見て真似てやりはじめる姿があった。



4. 4. 1-2 部屋の物を見る

別の日には4歳児クラスで顕微鏡の導入を行った。子どもたちは5歳児クラス同様、すぐに興味を示し、「見たい。」と部屋にある椅子を覗き込んでみると「何か見えた。」と嬉しそうな表情を見せていた。担任から「ゆっくり持ち上げていくと、どこかですごく綺麗に見えるところがあるよ。」と使い方のコツを教わると早速やってみようとする。初めはゆっくり持ち上げるのが難しく、何度も挑戦していた。すると「先生。見えた、地図みたいなの見えたよ。」と鮮明に見えるところを発見していた。今度は“別の場所はどうな風に見えるのだろう”と扉のレール付近を顕微鏡で覗いて見て「つぶつぶが見えた。」「茶色のがあった。」と先ほどの部屋の椅子のカバーとの違いを担任や友だちに伝えて、「ここ見てごらん。」や「ゆっくりだよ、ゆっくりね。」と見てほしい場所や使い方を友だちに教えたり、「次は○○ちゃんね。」とみんなが見られるように順番に回したりするなど、見えた物や見えた時の喜びを共有したいという気持ちが言葉や行動に表れているようだった。顕微鏡の操作方法が難しく、少し手こずる姿も見られたが友だち同士で操作方法を教え合い、多くの発見をしていた。



4. 4. 1-3 植物を見る

子どもたちから外でも使いたいというリクエストから園庭の植物も顕微鏡での観察を行った。園庭にある様々な植物を覗き込み、「この木はなんかぶつぶつがあるんだね。」「葉っぱに線がいっぱい入っているよ。」など多くの発見が見られた。その姿を見た周りの友だちも「どれどれ見せて。」と集まってきて、皆で顕微鏡の世界を共有していた。「虫とかも見てみたい。」とバツタとかも見てみようとする姿が見られたが、「動くから難しいな。」とどのようにしたら生き物も見えるか考える様子もあった。



4. 4. 1-4 氷、霜柱を見る

顕微鏡を見たいときに使えるよう“調べる部屋”に棚を作り、使いたいときは近くの保育者に声を掛け、いつでも使えるように顕微鏡を配置した。寒くなり園庭で霜柱を発見した時には「せんせい、この氷を顕微鏡で見たい。」と言い、霜柱を顕微鏡で覗くと「キラキラしているよ。」「宝石みたい。」と氷の世界に驚いていた。また、「氷を作ってみたい。」という子どもの思いから園庭の寒い所に水を置いて実験し、翌日できていた氷を見て「これも顕微鏡で見たい。」と子どもから声上がり、覗いていた。子どもたちにとって顕微鏡という道具が身近になっていると感じた。



4. 4. 2 実のなる木の立札と実のなる木マップを製作

「どの実が食べられるの?」という子どもたちからの疑問から子どもたちにわかるように実のなる木の立札とマップを製作した。

立札には、木の種類と食べごろの時期が記されていて、食べごろの時期の実の写真が添えられていた。立札に気が付いた 2・3・4 歳児クラスの子ども達は、「これなあに?」と話題にしていた。2 歳児クラスの子どもたちは、まだ実がなる前から「どこ?」と保育者に尋ね、しばらくしたら大きくなることや色が変わることの話を聞きながら、一緒に見守る姿があった。3 歳児クラスの子ども達は小さな実が見え始めるとすぐに気が付き知らせる姿があった。4 歳児クラスの子どもたちは、大人が気付いていなかった新たな実を見つけ、調べ始め、それがヤマボウシであり食べられることを発見し、新しく立札を作ることとなった。





5歳児クラスの子どもたちはマップに早速興味を持ち、はじめは「ここがもぐもぐ広場じゃない？」とマップがどの位置を示しているのか友だちと確認し合う姿が見られた。そして、「この実はあそこにあるよ。行ってみよう。」と友だち同士で実のなる木を探す探検ごっこが始まった。実際に発見すると「ここにカシスがあったよ。」

「こっちはみかんもあったよ。」と探検を楽しみ、「早く食べたいな。」と実の収穫に期待を寄せる姿が見られた。また、このマップがきっかけとなり、園内のマップやお店屋さんごっこのマップを作る子どもたちの姿も見られ、遊びの中にも広がっていった。実のなる植物の場所をマップとして可視化したり、未来の姿を表示することにより、子どもたちの植物に対する期待や興味を感じさせ、子どもたちの遊びの中にも繋がっていったと考える。

4. 4. 3 水槽の導入

子どもたちがより身近に生き物を感じられるように、5歳児クラスの部屋の中に水槽を導入した。準備を子どもたちと一緒にいき、観察しやすいように水槽の前にソファを設置すると早速子どもたちはソファに座り、「水族館みたいだね。」と嬉しそうに話し、メダカやエビの体をじっくり観察し始めた。子どもたちは「中の心臓とか見えるよ。」とエビの体の中が見える事に驚きを感じているようであった。また



「先生、写真を撮りたい。」と保育者の持っていたカメラで一生懸命エビの体を撮影したことからこの水生生物との関わりが行事に繋がっていった。「この写真をクイズで発表し



たい。」と話し、12月の発表会では保護者の前でその写真発表とクイズを行うこととなった。このように子どもたちの興味・関心に添って環境設定していくことで、色々なことに疑問を感じ、自分たちで探究する姿が見られることを改めて感じ、子どもの姿から思いに添うことが大切であると感じた。

5. 実践からの考察・まとめ

5. 1 子どもと過程を共有する保育実践

今回の研究において園庭整備から始まり、ビオトープや水槽整備を行なってきたが、保育者が用意した環境で子どもが主体的に遊び・学ぶのではなく、準備の段階から子どもと

共に協力し、過程を共有していくことで学びが深くなり、繋がっていくことが分かり、それらが主体的な深い学びであることが分かった。例えば園庭整備で植物と一緒に植える際にどのようにしたら植物を守ることができるかを一緒に考えることによって、多くのアイデアを共有し、子どもたち自身で自然を大切にしようという気持ちがみられた。また、バナナの苗を植えた時に「バナナをどのようにして食べたい？」とバナナを食べる事を想像し、期待を感じながら取り組んでおり、枯れたり、折れてしまった時には懸命に問題解決しようとする自発的に行動することが出来た。以上のように過程に子どもの学びが詰まっており、一緒に共有することで主体的で深い学びに繋がっていったと考える。

5. 2 生き物を大切に思う気持ちを育む

本研究の課題でもあった生き物を大切に思うということであったが、上記同様子どもたちと一緒に準備や整備することで自然と命を大切にすることを繋ぎたいと考える。4月当初は植物をすぐに抜いてしまったり、捕まえた生き物を粗末に扱ったりする場面が多く見られたが、自分たちで植えた植物を大切に、毎日一生懸命水をあげたり、メダカやエビの水槽を子どもたちで準備したことで自発的に世話や管理をする様子が見られた。またその過程を実際に経験していない子どもたちも友だちが行ったことを話で聞いており、「○○さんがやったから大切にしなきゃ。」と思い、話や写真で過程を共有することで生き物を大切に思う気持ちが生まれていた。このような姿から保育者が「生き物は大切にしないといけないよ。」と言葉だけで伝えるのではなく、その準備した過程などを可視化し子どもたちに伝えていくことが重要であると分かった。

5. 3 持続可能な環境を考える

持続可能な環境とは何かというところから話し合ってきたが、環境の定義が物的環境だけではなく、保育者や子どもの中の気持ちの持続という人的・意識的な環境も含まれ、それらの環境の持続が様々な環境の持続に繋がっていくことが分かった。物的環境ばかりを意識してしまうと結果としての環境に意識がいつてもうが、四季によって維持できる部分が少なく、持続が難しい。そのような物的環境の維持よりも保育者や子どもの自然を大切にするという意識の維持が可能であれば、四季に沿った植物や生き物を意識し、見た目ではなく、環境が循環するということが繋がっていくことが分かった。

5. 4 まとめ

本研究では環境の中から子どもが主体的に取り組むはじめ、対話的に関わり続けることから学びが深まっていく子どもたちの姿が見えてきた。子どもが「やりたい。」と思ったらずには一緒に行き、子どもたちの扱いやすい道具やものを用意しようとする試行錯誤が

保育者の専門性を向上させ、保育の質を高めることにつながる可能性が見えてきた。そして乳幼児の興味や関心を広げ、学びを深める環境作りを行い、各年齢の姿を捉えてカリキュラムに反映させることを目的としたが、実践を通して子どもたちと一緒に園庭の整備を行い、過程を共有することが上記の目的に全て繋がるように考えられる。そして結果的に過程を共有することから様々な物や命を大切にするという気持ちにも繋がり、子どもたちはもちろん保育者の成長にも繋がっていくことが実感として得られた。また、画像やエピソードを伝え合うことで保育者同士、保護者と共有もできる。以上のことより来年度も子どもと共に築き上げていくということをカリキュラムに反映させていくことが大切であると考える。

5. 5 考察に基づく課題と今後の方向性

本園は今年で 56 年目を迎え、開園当初とは園外の環境が大きく変わり、以前は周囲と連続する広い自然の中の一部だった自然環境も今は園内のみに区切られた貴重な自然環境となっている。そのような環境の中で保育環境としての自然とは何かを問い続け、何が子どもの学びに繋がるのかを考えてきた。そして今回実践をする中で自然は子どもの探究心のきっかけとなり、深い学びに繋がっていることが再認識できた。またそれぞれの実践から子どもの学びに向かう姿が具体的に見え、どの時期にこのような経験を積むことが深い学びに繋がるのかを理解を深めることが出来た。一方で自然環境を豊かに維持し、限られた中で循環させていくことの難しさを改めて感じている。雑木林も残る広い園庭環境でじっくり遊ぶため、子どもの姿から次につながる環境を設定するために、職員同士のこまめな連携や情報共有も必要であることが分かった。今後は子どもの姿と共に今回の研究で得た結果を職員同士で共有を行い、次年度のカリキュラムに各歳児でどのように組み込むのかを具体的に考え合い、多角的な視点で検討していく。また”保育環境としての自然とは何か”を考え続け、本園だけではなく、他の教育の場で汎用できる実践を続け、引き続き主体的・対話的に遊べる場の探究をしていく。

6. 参考文献

- 1:大豆生田啓友(2014)「子どもがあそびたくなる 草花のある園庭と季節の自然あそび」フレーベル館.
- 2:公益社団法人 国土緑化推進機構(2018)「森と自然を活用した保育・幼児教育ガイドブック」風鳴社.
- 3:佐藤将之(2020)「思いと環境をつなぐ保育の空間デザイン 心を育てる保育環境」小学館.
- 4:杉田啓三(2019)「発達 159 自然と子ども」ミネルヴァ書房.

5:能條歩・田中住幸（2018）「とぎすまそう！安全への感覚」 北海道自然体験活動サポートセンター.

6:能條歩（2017）「あなたにもできる！環境教育・E S D」 北海道自然体験活動サポートセンター.

共同研究者

（代表） 峰友 航

水野 将司

寺嶋 芹菜

奥住 大史

岡山 真由美

北 美智子

三須 暁子

鈴木 智子

横山 ゆり子

森永 路子